その影を砕け

船山　馨

河出書房新社

Kawade Paperbacks 77

その影を砕け

表紙絵・イラスト　沢田重隆　　装幀者　原　弘（NDC）

昭和38年12月5日　初版印刷
昭和38年12月10日　初版発行

定価　280円

著者　船山馨（ふなやま かおる）

発行者　河出孝雄

印刷者　小泉輝章

発行所　東京都千代田区神田小川町3の8　株式会社 河出書房新社

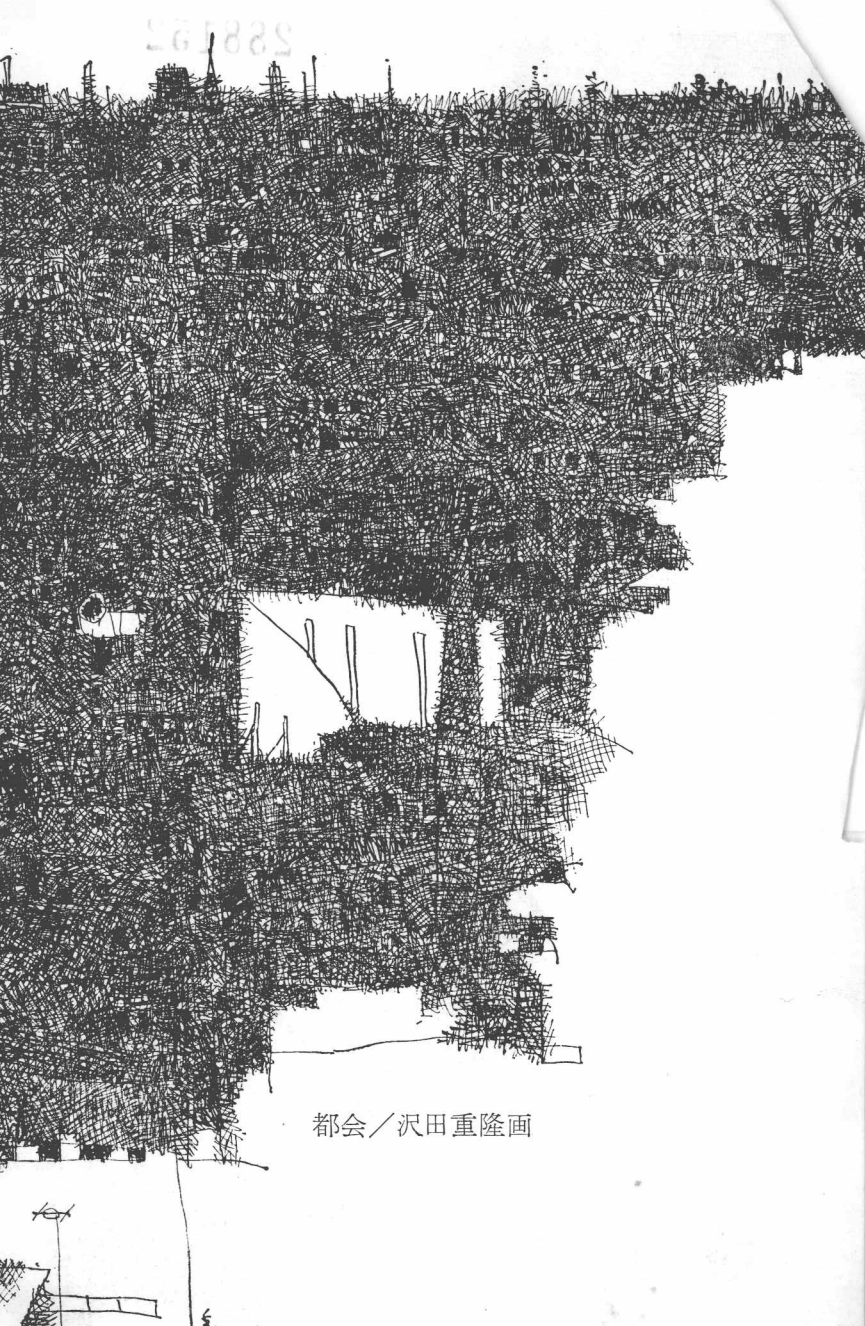
電話 東京(291)3721～7
振替口座 東京 10802

© 1963

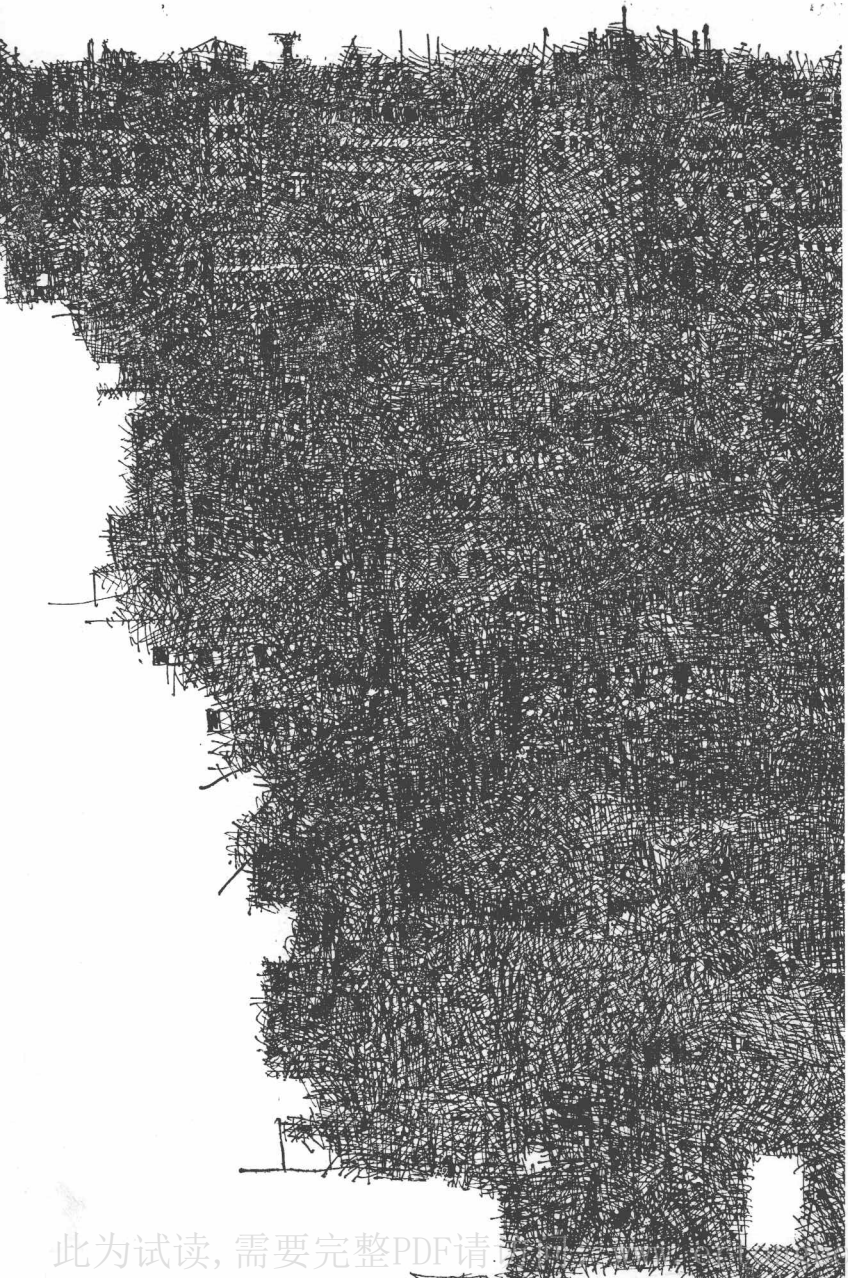
印刷・小泉印刷株式会社　　落丁本・乱丁本はお取替えします

長篇小説

その影を砕け



都会／沢田重隆画



此为试读，需要完整PDF请

1

背後で鉄の扉の閉まる音が、重たく軋んで、暮色のたちこめはじめた府中の町の、黝んだ低い家並が鏡太郎の前に拡がった。視界をさえぎる壁はなかった。それは新鮮なおどろきであった。幽かな目まいが、心のどこかにあった。

彼は振り返って、高い灰色の塀を見上げた。

自分の立っているのが、その厚いコンクリートの壁の内側ではなくて、外側の世界だという実感が、まだ不安定に揺れていた。二年四か月のあいだ、壁はいつも彼の眼の前にあった。壁の内側も、ある種の世界にはちがいなかった。しかし、そこにはひと握りほどに圧縮された空間と、流れることを停止した時間があるだけであった。人間は生きながら死んでいた。

彼はすがれた町のたたずまいに眼を返しながら、深く息を吸い込んだ。三月もなかば近いというのに、空気はまだ冬の冷たさのままであった。これが自由というものの味なのだ、と彼は自分に言い聴かせてみた。解放感はあったが、予期に反して、不思議なほどよろこびは薄かった。

「さあ、はよいにましょ。岩瀬さんもおみえどすわ」

鏡太郎の手から手まわり品をいれた風呂敷包をとりながら、千加子は寄り添うようにしてささやいた。頬がよろこびとなつかしさで薄く上気していたが、鏡太郎の心を傷つけるのをおそれる気遣いが、彼女の態度をいくらかぎこちないものにしていた。千加子にとっても断絶していた歳月の堆積は、逢ったとたんに消え去るほど軽いものではなかったにちがいなかった。

岩瀬という名前は、すぐには鏡太郎の記憶に浮かんでこなかった。それよりも、今日の出所を知らせておいた弁護士の姿を求めて、彼の視線はむなしくあたりをさまよった。

「汐見さんは？　みえないようだね」

「先生はここんとこ、ずっと大阪なの。お忙しいらしいわ」

鏡太郎は無言だったが、軽い当身を喰わされたような気がした。

彼の罪名は背任と偽造有価証券行使であったが、背任はともかく後者に関するかぎり、当初は、無罪に持ち込める可能性もあったし、最悪の場合でも執行猶予には漕ぎつけられるものと、鏡太郎も確信し、汐見弁護士もうけあっていたのである。それが三年の実刑という結果になったのは、汐見の法廷戦術の失敗に大部分の責任があった。汐見もそれを認めていた。

今後のことで折りいって相談したいことがあるから、迎えに来てほしいと、依頼の手紙を出したのは一週間も前である。たとえ大阪へ出かけているにしても、彼のために一日だけ割いてくれてもいいはずであった。げんに井汲千加子は京都の家から馳けつけている。

「ほら、あそこに、岩瀬さんが……」

千加子が通りの向こうを眼で指した。

差入れの弁当屋の店先に、ひとりの男が立っていた。

五十がらみの大柄な男で、型の崩れた黒い中折帽子を横っちょにかぶり、合オーヴァのポケットに両手を落し込んで、唇にぶらさげた煙草の煙りが眼にしみるのか、肉の厚い童顔をゆがめて片眼を眇めたまま、鉛色の空を眺めていた。鏡太郎の記憶もよみがえった。

岩瀬伸五には得体の知れないところがあった。銀座裏のビルの一室に事務所を構えてはいるが、なにが本業なのかはっきりしない。

会社と金融業者間に立って、手形割引や融資の仲介斡旋をしていることは確かだから、その限りでは金融ブローカーであったが、総会屋としても筋金入りだというし、手形をまきあげることには独特の腕を持つパクリ屋だという噂もあった。三年前のミサキ通信工業事件のとき、鏡太郎は鳥飼電機工業に吸い上げられたミサキの予備株券のうち、東京方面で流された分の回収を岩瀬に依頼したことがある。彼はサルベージ屋としても抜群であった。

しかし、岩瀬とはそれだけのつきあいしかなかっただけに、彼の出迎えをうけるのは思いがけなかった。

「おめでとう。岬さん、すこし痩せたね」

岩瀬はくわえていた煙草を、舌で押し出すようにして捨て、歩み寄った鏡太郎に持ち前のぶっきらぼうな調子で声をかけた。

鏡太郎は無表情な眼を相手に据えた。

「君が来てくれるとは意外だね」

「短いあいだでも、あんたの側について働いたんだから、これくらいのアフター・サービスは仁義だろうし、あんたが、どんな面をして出てくるかってのも、ちょっと興味があったんでね」

「泣きっ面でもしてみせなけりゃ、ご期待にそむくかね」

「だいぶ骨っぽくなったじゃないか、専務さん」

と、岩瀬は片頬だけに笑いを含んだ。

「そう言っちゃなんだが、なんたって苦労しらずの坊んぼん育ちだから、二年も喰らい込んでいりゃあ、きんたま抜かれた猫みたいな代物になってやしないかと思っていたんだがね。そのぶんならまあ大丈夫だ」

千加子は岩瀬のむき出しな言い方に辟易して、たそがれのなかに視線をそらしたが、走ってくる空車が眼について手をあげ、二人をうながして、座席に体を埋めると、

「築地まで」

と、運転手の背中に言った。

「鏡太郎さん、知ってはりますやろ、芳子叔母さんのとこ。お祝いの支度をして待ってはるわ」
千加子の叔母の藤木芳子は、築地に関西割烹の店をもっている。夫の矢之助も大阪の出で、夫婦とも気のおけない人柄なので、鏡太郎も東京で人に会うときは、たいていその家を利用した。だが、いまの彼は、そのころの岬鏡太郎ではなかった。会社も財産も根こそぎ失ったばかりか、個人としての名誉も泥土に墜ちた。裸一貫の身に、刑余者という刻印まで打たれたみじめな姿で、芳子たちの前に立つのは、さすがに苦痛であった。
彼は眼を閉じて、その心の痛みを愛撫した。すべてを失った彼にとって、いまはこの痛みだけが、残された唯一のものといってよかった。彼は受けた傷の癒えることを望んでもいなければ、その苦痛を忘れたいとも思っていなかった。むしろ心の傷口が、いつも新たな血をにじませ、痛みがはげしさを増すことを願った。それによって、加害者たちへの憎悪も一層深く、牢固として抜き難い執念となるはずであった。鏡太郎にとって、憎しみは心の支柱であり、それだけが生きる情熱につながっていた。壁の中の二年の歳月が、彼の魂にきざんだ爪跡であった。
千加子がバッグからスリー・キャッスルの緑色の罐をとりだして、蓋をまわして封を切ると、ライターを添えて、そっと鏡太郎の膝のうえに置いた。
「よく覚えていてくれたね」
鏡太郎は罐を掌で撫でながら呟いた。好みの煙草にライターで火を点けるという、ありふれた日常の自由が、おどろくほど新鮮な感じであった。彼はやわらかな香りの紫烟を、ゆっくり胸のなかへ吸い込んだ。戻ってきた自由の実感が、ようやく胸にひろがってきた。
車はあらかた夜の色になった甲州街道を、新宿へ向かって走っていた。街の灯がしだいに明るさと数を増して車窓を流れた。
「父がよろしゅう言うてました。お眼にかかるのを、とてもたのしみにしてますわ」
千加子がすこし改まった口調で言った。
「どうなの、その後。すこしはいいの？」
「お迎えに出ないけないんですけど、まだ旅行は無理ですよってに」
鏡太郎の眼は、車窓を流れる街のネオンの明滅を吸ったままであった。それは忘れていた眺めであった。壁の中の夜には色彩がなかった。
千加子の家は京染屋であった。京染の〝井汲〟といえば古い暖簾であったが、千加子の父の修造が名人かたぎの一徹な気性で、友禅の伝統と格式を固守するばかりで、当世むきの、工程が安易で利益の多い仕事には眼もくれなかったから、経営はまえから苦しかった。それでも鏡太郎の父の克也が生きていたころは、修造のそんな気風と仕事を珍重して、資金繰りの相談にも乗ったりしていたが、その克

也も亡く、おまけに去年の夏、工場を見まわっていて脳溢血で倒れてからは寝たっきりであった。支配人格の那須隆吉の、二十九歳という若さに似合わない冴えた手腕に支えられていなかったら、井汲の暖簾はとうに消えていたに違いないのだった。その隆吉のことを思うと、千加子は心が重かった。

車が新宿の街へはいると、それまで腕組みをしたまま、居睡りでもしているようだった岩瀬が、のっそりと大きな体を起した。

彼はオーヴァのポケットから、皺くちゃな煙草の袋をつまみ出してマッチをすると、それを唇へぶらさげて鏡太郎のほうへ体をねじった。

「ところで、どうするね。まだ当分東京にいるのかね」

「いや。一応、大阪へ帰る。たぶん、近いうちに、また出てくることになるだろうが……」

「そうか。人間、七転び八起きだ。ひとつ、捲土重来といくんだな」

岩瀬は無愛想な口調で言ってから、運転手の背中に、

「おい、ちょっとそのへんで停めてくれ。ひとり降りる」

「あら、どうしてどすの？」

千加子がきいた。

「一杯やって帰るよ」

「そうどしたら、ご一緒にどうぞ」

「いや、どうも酒だけは、自前でなくちゃうまくないタチでね」

岩瀬はニベもなく言って、停まった車から舗道へ降り立った。

「じゃ、岬さん。健闘を祈っているよ」

「ああ。じゃ、また会おう。今日は有難う」

鏡太郎は無表情な声で応えた。

「変わったお人やな」

走りだした車のなかで、千加子が呟いた。

鏡太郎はそれには応えずに、行手の夜景に眼をあてていたが、すこししてから抑揚のない声できいた。

「君があの男に連絡したの？」

「ううん。あそこで会うたんえ。うちが行ったら、あの人、先に来ておいでどしたえ」

「僕が今日出られるってことが、どうしてわかったんだろう。汐見さんからでも聞いたのかな」

「鏡太郎さん。さっきは黙ってましたけどな……」

千加子は思いきった様子で言いかけて、ちょっとのあいだ口ごもった。

「汐見さんはもう、あなたの側の人じゃおへん。あの人は、鳥飼電機工業の顧問弁護士にならはったんどすえ」

鏡太郎は千加子を凝視した。彼がまともに千加子を見つめたのは、府中を出てきてから、これが初めてであった。彼の双眸には、異様に冷たい光が燃えた。

「それは、いつからなんだ」

「鏡太郎さんの裁判が終って間もなくどしたな。うちの父なんかは、汐見さんは裁判の初めから、鳥飼電機の側に買われていやはったんだ言うてはるくらいどす」
「それをどうして、今まで知らせてくれなかったんだ」
「父の言い分に証拠があるわけやなし、鏡太郎さんの心を乱しとうなかったんです」
鏡太郎は煙草をシートの灰受にねじりつけながら、
「そんなことじゃないかとは思っていたんだ」
と、独り言のように呟いた。底冷えのある低い声音であった。
弁護士が相手方に身売りしていたのなら、敗訴は最初から決まっている。裁判などというものではなかったのだ。
「新庄謙介はどうしている？　あの男も鳥飼電機に拾われているんだろう」
「ええ、総務部長さんだそうどす」
意外なことではなかった。ミサキ通信工業の会計部長だった新庄が、会社を裏切った褒美にしては、いささか酬われ方が薄いくらいのものである。
「鏡太郎さんが、いまなにを考えておいでか、わかるような気いします」
千加子は哀願するような眼差になって、彼を見上げた。
「でも、もうすんでしもうたことは忘れてほしいのどす。二度とあんな人たちにかかわりあわんと、ご自分の幸福や平和な生活だけを考えるって、うちに約束してほしい」
「幸福だの、平和な生活だのってものは、二年前に死んでしまったよ」
鏡太郎は行手を見つめたままで言った。
「僕は投げつけられたものを投げ返すために、あのコンクリートの壁の中から出てきたんだ。ゆるしたり、忘れたりするためじゃない」
「そんなことをしたら、あなたも傷つかずにはすみません。こんな不幸のあとで、もう一度ご自分を不幸にすることはないはずどす。しかも、ご自分の手で……。お願い、よう考えてみて……」
「考えたさ。二年四か月ものあいだ、朝から晩まで、夜中までもね。刑務所ってところは、考えることのほかに自由のないところだからね」
千加子の眼は思わずバック・ミラーを掬い上げた。運転手の顔は見えなかったが、聞えなかったはずはなかった。
刑務所ではじめて鏡太郎を見たときから、千加子は彼の変化に気づいていた。彼の中で彼女の知っていた鏡太郎は死んで、見知らぬ人が生きていた。胸の底のほうから、不安が揺れのぼってきた。
東劇の前を左に折れたところで、千加子は車を停めた。
なまこ塀に〝河庄〟と軒燈のはいった植込みのなかの敷石を、千加子とならんで入ってゆくと、式台に膝を突いて出迎えた顔馴染の女中頭が、すぐ自分で案内に立った。舞台のある奥まった部屋へ通されて、席につくかつかないか

に、芳子が顔を出した。気性が勝っているのに涙もろい芳子は、挨拶をしながら、もう眼が潤んでいた。
すすめられるままに、鏡太郎がひと風呂浴びて座敷へ戻ってみると、そのあいだに千加子も、手早くスーツから和服に着換えていた。さすがに井汲の娘だけあって、若いに似合わず落ちついた好みで、匂うような気品があった。心のどこかで、ふと眼を見はる思いが、鏡太郎にはあった。
主人の矢之助も加わっておめでとうございます、と三人が盃をあげ、ありがとう、と鏡太郎はそれをうけた。
「千加ちゃんもすっかりいい娘さんになったね」
彼は胸に浮かんだ感慨を言葉にした。
「もう二十四ですもの。すこしは娘らしくなってくれませんと困りますわ」
と、芳子が微笑を含んだ。
すると、葉子は二十六になったはずだ——と、鏡太郎の思いは、いまも忘れ難く胸に棲んでいる人のうえにつながった。痛みに似た疼きが、その思いのなかにあった。盃を持ったまま、ふと放心の表情になった彼を、藤木夫婦は幽囚の歳月の癒されぬ翳と見たようであった。
「いけませんわ、岬さん。そんなお顔をなさっちゃ、今夜は厄払いに、たのしく遊びましょう」
と、芳子が弾んだ声で言い、
「綺麗どころを待たせてありますから、踊りでもご覧になっていただきましょうか」
と、矢之助は自分で芸妓たちの待っている次の間へ立っていった。しかし、千加子だけは鏡太郎の心の行方を読んでいるようであった。彼女はじっと鏡太郎を見まもっていた。わびしげな沈んだ眼差であった。
舞台の袖に地方がならび、地唄舞がはじまっても、鏡太郎の心は遠くをさまよっていた。彼の眼は舞台の踊りを映していたが、見てはいなかった。胸の底にたたずんでいる面影だけが、彼の意識にあった。
青山の自宅へ泊ってほしいという、藤木夫妻の誘いを無理にことわって、近くのホテルに部屋をとることにして河庄を出たのは、九時をいくらかまわったころであった。
千加子が途中まで送ってきた。
鉄錆色のスモッグが夜空を覆い、まわりの明りやネオンの色が不自然なほど遠く濁っていた。鏡太郎は新橋演舞場の裏側を西銀座のほうへ渡ってゆきながら、埋め立てられた築地川に視線を落した。彼の記憶にある黒く澱んだ水の流れも、川面にもやう貸しボートの群れも姿を消していた。川床には、コンクリートが張られ、東劇の先の、以前かき船が浮かんでいたあたりには、高架道路の脚柱が立ちはじめている。
「変わったな、東京も……」
鏡太郎は呟いた。
社会から隔離されていた二年四か月という時間のロスが、彼の予想よりもはるかにきびしい実感となって、鏡太

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

郎にのしかかってくるようであった。経済界の実相も、三年前のそれからは、想像も及ばない変貌をとげてしまっているのかもしれなかった。彼の知っていた水脈は水路を変え、町並であったところが高架道路になり、思いもよらない町外れにビル街が出現しているのに似た、眼まぐるしい移り変わりが、彼の知っていたころの事業の世界を押し流してしまっているとすれば、彼のこれからの計画は、盲の手さぐりめいてくる。不安というよりは怖れにちかいものを、鏡太郎は自分の前途に感じないではいられなかった。

「青山へ泊ってくだされば、いいんですのに……」

千加子はまだ未練げに独りごちた。

「わるいが、独りになりたいんだ」

鏡太郎は川床から視線を返して歩き出した。

二人は無言でしばらくならんで歩いた。銀座通りの灯なみが眼の前にあった。

「鏡太郎さんが、なにを考えていやはるか、わかってるわ……葉子さんのことね」

千加子が足もとに視線を落したままでいった。

「あの方、結婚したのよ」

東の間、鏡太郎の歩みがとまった。彼は千加子を凝視した。詰問するようなけわしい光が、その眼の中にあった。千加子はその凝視を受けとめて、彼が反問するのを待った。しかし、鏡太郎は無言であった。彼はふっと千加子から視線をはずして歩き出した。いきおい、彼女は自分の言いだしたことを、問わず語りに説明するかたちになっていた。

「もう、二年ちかくになるわ。相手の人は江森さんいう、雪の結晶を研究してはるお人なんですって。まだ若い人やそうどすけど、結晶学のほうでは、とくべつに有望視されているらしいんです」

「……」

「葉子さんは気がすすまなんだらしいのどすけど、新庄さんが強引に押しつけてしまはったいう噂どす」

そんなことは理由にならない——と、鏡太郎はささくれだつ胸のなかで、歯軋りをする思いであった。

ミサキ通信工業の禄を喰みながら、会社を裏切り、専務の鏡太郎を法律上の犯罪人に仕立てる陰謀にまで手を貸した新庄謙介なら、娘の葉子を鏡太郎から引き離す工作をするのは、当然のことであった。葉子がそれを予期しなかったはずはない。たとえ謙介や周囲の圧迫がどれほど強引だったにもせよ、それを耐えぬくかどうかは、葉子自身の心の問題なのだ。つまりは葉子も、結果的には、その父と同様に、鏡太郎を売ったのだ。鏡太郎は新庄謙介に癒しがたい憎しみを抱いてはいるが、その仇敵の娘として葉子を考えたことは、束の間もなかった。新庄謙介は敵である。だが、葉子は彼にとって、つねにただ一人の人であったのだ。彼女を想うことによって、鏡太郎は二年のあいだ、かろうじて獄舎の孤独にも耐えてきたのである。鉄格子のなかの眠られぬ夜々に、心のなかで彼女の名を呼び、明け方のあ

さいまどろみのなかでも、彼女の夢を見つづけた自分の姿のみじめさが、いまさらのように鏡太郎の胸を嚙みくだいた。

「それに、江森さんとのことは鳥飼電機の社長さんからのお話だったので、新庄さんもどうしても葉子さんを承知させないではいられなんだのでしょう」

「鳥飼大二郎からの話だって？」

「ええ、鳥飼社長がお仲人をなさったんどす」

鏡太郎は街の灯に眼をあげたまま、額に太い縦皺をきざんだ。痩せ落ちた頬に、痙攣が走った。

「その江森というのは、鳥飼大二郎とどういう関係の男なのか、君は知っているか」

「鳥飼電機の技術研究所で、なにかの部門の研究主任をしているって聞きましたけど……」

と応えはしたが、くわしいことは、千加子にもわかっていなかった。

「いつ、大阪へお帰りになる？」

「わからん。千加ちゃんは、僕にかまわず、先に帰ってくれ」

鏡太郎は立ちどまって、煙草にライターをすったが、その指先のふるえが、千加子の眼にもはっきりとうつった。

2

ミサキ通信工業は鏡太郎の亡父岬克也が、その生涯を賭けて、孜々として築きあげた一代の所産であった。

厖大なスケールをもつにいたった今日の日本の電機工業界の水準からみれば、資本力も薄く、製品の分野も狭くて、一流の大会社と比肩する力は勿論なかったが、中どころのメーカーとしては、堅実な業績と長い社歴によって、業界に知られていたことは事実である。それがここ十年足らずのあいだに、急速度で社運が傾くにいたったのは、トランジスター研究の立ち遅れが最大の原因であった。

碍子工場の見習職工を振り出しにして、電機工業界の一角に地位を築いた、いわば立志伝中の人物である克也であってみれば、彼が先見の明に乏しく、決断力に欠けていたとは思えない。しかし、過去における彼の成功が、頭脳の明晰さや果断な勇気よりも、多く地味な努力の積み重ねと、幸運に依っていたことも否めない事実であった。ことに戦争中、陸軍の御用会社となって、軍用無線機の量産で社業の飛躍的な発展を遂げたことは、それなりの意味では幸運であったが、一方では後年の苦境をつくる原因になったともいえる。規格の一定した製品の量産だけに全力を集

中しているあいだに、新しい分野を拓くためぬの研究部門が留守になり、その惰性は戦後まで尾をひいた。そうして、気がついたときにはすでに遅かった。極小型で、しかも大出力の真空管を開発する研究は、ミサキ通信工業でもかなり熱心に続けられていたが、トランジスターやダイオードなどの半導体結晶の研究面では、完全に水をあけられてしまっていたのである。

六年前、東京のある私大の工学部を卒業したばかりの鏡太郎が、ミサキ通信工業の専務取締役に就任した。無理がたたって、克也が病いに倒れたからである。大学時代の鏡太郎の専攻は光学で、世界的な光学の権威である主任教授の緒方信正博士から、是非研究室にのこってほしいと懇望されたほどの、有望な学才を示したが、会社の経営に当ってみると、その方面でも彼は稀れにみる俊才であった。彼の手腕と努力は着実に効を奏して、専務就任からわずか三年のあいだに、社運はほとんど奇跡に近いほどの立ち直りを見せはじめた。そこで、彼はかねて心中に秘めていた計画を、実行に移す決心をかためたのである。

緒方博士の教室にいたころから、鏡太郎はひとつの夢をもっていた。学問的には〝誘発放射線による光の増幅〟と呼ばれているレーザーの研究である。単結晶体の光を電波と同様に通信に利用することは、すでに未開の分野ではなくなっているが、それはいまのところ、ごく簡単な信号の受送信が精一杯である。もし、純度の高い人工結晶を開発して、その光波にラジオの電波と同じ働きを持たせることができれば、現在のトランジスターもダイオードも、一挙に旧時代のものになるほどの、通信工業の革命が実現する。炭素の単純結晶体であるダイヤモンドの人工合成に成功している現在、それが不可能なはずはなかった。

たまたま鏡太郎が、ミサキ通信工業の社運挽回に乗りだしてから二年目の秋、アメリカのヒューズ航空機会社の研究所が、人造ルビーを使って、一平方センチ当り十キロワットという強度の出力をもった光波をつくり出すことに成功したという情報が入って、これは彼を昂奮させた。研究はもちろん極秘であるし、データーの片鱗もうかがい知ることはできないが、その理論は明白であり、すでに世界のどこかで成功の域に達したものが、できないはずはないのである。もし、ラジオのレーザー化が成功すれば、トランジスターでの立ち遅れなどは問題ではない。ミサキ通信工業は一躍世界をリードする不動の位置を確保することになるのだった。しかし、この研究には厖大な費用がかかる。研究所とその設備に要する費用だけでも生やさしい金額ではなかった。

鏡太郎は本格的な研究の前提として、まず試験的に小規模な研究所の設立をもくろんだが、それですら、ようやく地力を回復しはじめたばかりのミサキにとっては、容易な業ではなかった。

どのくらいの時日で研究が成功するかという、具体的な

予定でも立つのなら、銀行からの借り入れも期待できるかもしれないが、その目算も、やり始めてみなければわからなかったし、だいいち、業界から出し抜かれるのを防ぐために、研究は秘密裡に進める必要があるのだった。銀行に計画を説明することは、外部に機密の洩れる危険もあった。増資をして、その払込金を費用に充てることができれば理想的であろうが、ようやく回復期に達したばかりの会社では、増資を保証するだけの資産内容に欠けていた。

淀川べりに近い高槻の会社所在地は、旧陸軍の指定会社時代に、将来の拡張にそなえて手に入れた広大な面積で、その三分の二以上がサラ地のままになっていたが、これもまだ二重に担保に入っている状態で、金策は難航をきわめた。

鏡太郎の意を体して奔走していた会計部長の新庄謙介が、耳よりな話を持ってきたのは、ちょうどそんなときのことであった。

新庄はミサキ通信工業が有線電話の受話器の部品をつくる、片々たる小会社だったころから、岬克也の手足となって働いてきた、いわば子飼の古参社員であった。克也は全幅の信頼を寄せていたし、彼のほうでも、かつてその期待を裏切るようなことはなかった。鏡太郎は彼の娘の葉子と、学生のころから相思の間柄であったし、会社の前途にはっきりした見通しがつくようになり次第、二人が結婚することは、当人たちばかりでなく、周囲からも既定の事実と目されていた。

新庄が持ってきた話の相手は、楠本という大阪でも古手の金融業者であった。むかし、ミサキの創業時代に、一二度急場しのぎの金を借りたことがあったのを思い出して、会いに行ってみると、無担保ではたいしたことは出来ないが、昔のよしみもあることだから、三千万円くらいなら融通してもいいと、たいそう好意的な話だったという。

躍起になって無理算段をしても、思うように金が集まらないでいるときだけに、無担保の三千万円は、咽喉から手が出るほどの魅力であった。ただ、日歩二十銭という高利が、鏡太郎をためらわせはした。もともと楠本は高利貸であるし、こっちに担保がないのだから、その程度の条件は当然であったが、金の使途が一種の設備投資である。短期間に決済のできる金でないだけに、利息に追われる心配があった。

鏡太郎がそれを言うと、

「それも絶対的な条件というのでもないらしいですよ。私の見たところですと、話のもってゆきようでは、もう少し安い金利でも承知するんじゃないかと思います」

という新庄の意見であった。

鏡太郎は病床の克也とも相談して、とにかく楠本に会ってみることにした。祇園の料亭に席を設け、新庄も同席した。

楠本は、六十をいくつか越えた年配で、白髪頭を五分刈

りにした風采のあがらない小男であったが、物腰が静かで、柔和な印象を鏡太郎は受けた。彼は克也との昔の思い出話などを、控え目な口調でしゃべった。態度には好意があふれていた。鏡太郎が金利の問題を切り出すと、楠本はしばらく考え込んでいてからきき返した。

「そちらはんのご都合は、なんぼぐらいやったら、よろしまんねん？」

「身勝手なお願いですが、現在のところ、十銭でもかなりつらいのです」

「十銭……でっか。銀行かて、裏へまわったら、それぐらいは取りますがな」

楠本は困惑した表情になって、つぶやいた。

当然であった。まして彼は銀行ではない。しかも無担保ときている。

「楠本さん。このとおりです」

鏡太郎は卓子に両手を突いて、頭を下げた。

「まあ、お手を上げとくなはれ。わてもお父さんの昔馴染（なじみ）やよって、なんとかご相談に乗ってさしあげよう思うて、乗り出したことやし……」

楠本はそう言って、また考え込んだが、やがて微笑しながら顔をあげた。

「よろしゅおます。わても乗りかかった船や。お望みどおり、十銭で手を打ちまひょ」

「ほんとうですか。楠本さん、ご恩に着ます」

鏡太郎はうれしさで胸がしびれた。

「ただ、かたちばかりでも担保がわりに、なんぞ預からしていただけまへんやろか。そうやな、たとえば予備株券みたいなもんで結構ですよって」

「予備株券を……。ですが、あれを社外へ出すのは違法行為になりますし、担保としても、なんの価値もないはずですが」

「そのとおりだす。けど、担保やのうて、いわばわての気慰めみたようなもんだすよってな。わても金貸が商売だすよって、なんぼ商売気抜きにしても、まるで無条件で金を貸したみたいな恰好になるのは、外聞が悪うおます。たとえ一文にもならんもんでも、お預かりしたいうかたちがつけば、わての気もすみますのや」

楠本は盃を含んでから、また静かな口調で言い足した。

「それに、予備株券の持出しが違法いうても、市場へ流しでもするんやったら、そのとおりだす。けど、個人的に預かって保管するだけのことやったら、ちっともご心配なことあらへん。もちろん、秘密は守ります。わてかて、予備株券みたいなしようもないもんで、金貸したなんて知れて、仲間うちの笑いものにされるのはかないまへんよってな」

鏡太郎は返答に窮した。

予備株券は株主名のない補充用のもので、そのままでは正規の株券として通用しない。株券を紛失したり、損傷し

た株主から、再発行の請求があった場合や、十株券十枚を百株券一枚に書き換えるような場合のためのものである。従って予備株券であるあいだは、ただの無価値な紙片にすぎない。そんなものでも、一応預かる形式を踏まないことには、金貸としての面目のつくろいようがないという、楠本の気持は鏡太郎にも理解できないことはなかった。しかし、予備株券の社内保管の責任は、商法によって厳重に義務づけられている。たとえ個人的にもせよ、保管先を社外へ移動することは、明らかに法律違反であった。

鏡太郎は確答を避けて、楠本と別れた。

それからは連日、克也の病床で極秘裡に協議がつづいた。重役会にはかることは絶対に避けたいというのが、新庄の意見であったからだが、克也も鏡太郎も同じ思いであった。重役たちの耳に入れば、紛議の種になるのは眼に見えていたし、外部に洩れる危険も充分に考えられたからである。

数日にわたる協議のすえに、鏡太郎は楠本民平の条件を呑む決心をした。新庄がもっとも積極的にそれを支持したし、克也も昔の印象から楠本の好意を信じる気持になったようであったが、それよりも克也は創業以来の腹心である新庄謙介に、全幅の信頼をおいていた。新庄に確信がある以上、それを疑ってみることは、彼にはできなかったのである。克也ほどではないにしても、鏡太郎も新庄に危惧の念をはさむ理由がなかったし、楠本民平にも、小猾い金融業者とはちがった、幅の広い人間的な魅力が感じられたのは、やはり彼の若さのせいだったのであろう。鏡太郎はその後、数度楠本に会って、額面一万円の百株予備券五千枚を、厳秘に付する約束で預け、引替えに三千万円の融資をうけたのであった。手形は六十日ごとに書き換えて、更新してゆく契約であった。

ミサキ通信工業の株券原簿に載っていない番号を打った百株券が、主として東京方面で出まわっているらしいという情報を鏡太郎が耳にしたのは、最初の手形書換をして間もなくであった。

競争会社や乗っ取り屋が、目的の会社の経営を攪乱するために、その種の工作をすることも、あり得ないことではないし、単純な偽造詐欺は往々にしてその例がある。ミサキの重役や株主たちが、初めのうち、偽造株券だと思ったのは当然である。だが、鏡太郎と克也が受けた衝撃は、株主たちの想像を絶していた。

偽造株券を流されたとしても、その会社にとって大問題にはちがいないが、それは外部から振りかかって来た災難なのだから、処理の仕方はある。もちろん、法律は被害者である会社の味方だし、経営者の失態でもない。

だが、担保がわりとして、楠本民平に預けた予備株券が市場へ出たものとすれば、偽造株券の場合などとは問題の性質がちがってくる。予備株券は正規のものではないが、けっして偽造株券ではない。社外不出のはずのものが、市

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo